

小學讀本

三

T1A1
10
Mo 24

讀本卷第三

神原芳野 編次

第一

^{稷類の外} 稻の種類三百餘品に至るといへども、^糯糯と^粳粳との
^{如何れり}早中晩^ノ由て名を異^ニせりあり、水^ノ種^ヲるを
 常とせれども、又圃^ニ種^ルあり、是を早稻^トといふ、
 又^籼籼あり、舶來の種あるを以て、又大唐米と呼ぶ、
 赤白の二種あり、水旱^ノ稷類の別あり、稻^ノ同^シ
 といへども、味輕淡あるを以て食ふ者希あり

稷類の外
 如何れり
 稻の類あり

第二

讀本
 卷第三
 第一

種を種
次第如何

日々飯を造る者ハ、糶あり、舂きて養ふ作る者ハ、糯あり、二ツの者土地ニ由りて、種法を異にし、いへども、大抵種を水中ニ漬し、日を経てこれを假の田ニ種う、苗代是あり、芽を生して七八寸ニ至る比、水田ニ分つ、是を田植といふ、植ゑて後ニ田中の草を拔去る事、三度ニ至る農家稼穡の辛苦記を以て勝ふべからん

第三

大麥小麥
ハ各何
作

稲ニ並ぎて、人生を養ふ者を麥といひ、麥ニ大小の別あり、大麥ハ飯ニ造り、麩ニ作る者あり、芒あり

を常とし、然れども亦芒あり、小麥ハ麩を以て作る者あり、芒あり、芒を常とし、又芒あり、麩ハ多く温飽ニ作るを以て、温飽の粉といふ、其皮を麩といふ、物を洗ひて舂く汚を去る、食用の麩と混ぜり

第四

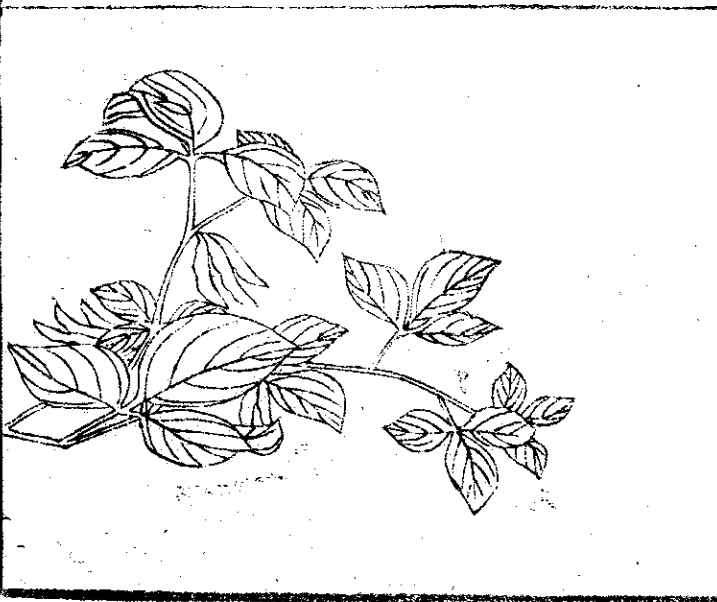
粘ありを黍といひ、粘なきを稷といふ、猶粟と秫との別あり、如し、蜀黍ハ畧して唐と稱ふ、粉と為して糲ニ作る、玉蜀黍ハ又南蠻きびと稱ふ、炙り食ひ、又餗饌ニ作る、稭ハ穂細くして黍の如く

粟黍の類
ありを何
と稱ふ

其米食ふは、大豆と異なり、以上の諸穀、皆粒食を資くべしといへども、稻麥の如き大益ある事あり

第五

豆は、大小の二類あり、
大豆、蠶豆、刀豆、藤豆、隠元、
大角豆の如きは、皆別種
に属す、大豆は黒、白、黄、褐、
斑等あり、小豆は白、小豆、
黒小豆、绿豆の属あり、又

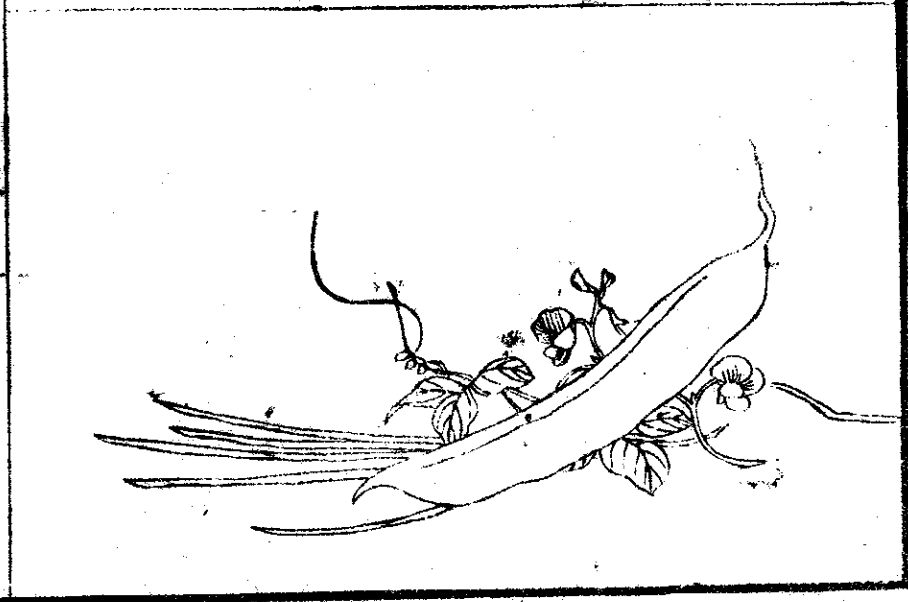


大豆小豆の属如何ある種あり

豇豆あり、小豆に似て扁く、十六大角豆は、其莢形豇豆に似て長く、皆小豆の属あり、

第六

蘿蔔ハ、古に大根といひ、其字の音を呼習つてあり、細く小きを細根大根といひ、細くして長きを波多野大根といふ、其



蘿蔔類の大小の如何の類あり

極めて大なる者尾張薩摩に産し其尾張に産して味美なるを宮重大根といふ、蕪菁ハ根扁きあり、長きあり、極めて大なるハ近江尾花川に産し、近

江蕪といふ、凡菜類多しといふ、じも、葉莖根を連ねて食ふべきハ、蘿蔔蕪菁の二種あり

第七

根をのこ食ふべき菜ハ、牛蒡、胡蘿蔔、及芋類、百合



芋類ハ同類別敷

蓮根、過ぎに、其中特ニ種類あるハ、芋あり、里芋、唐芋ハ、頭芋、蓮芋、皆莖をも併せ食ふ、薯蕷ハ、古よりいもの名を、單稱をといふとも、自ら別種あり、佛掌、諸黄獨、皆類あり、甘藷、馬鈴薯ハ各別として、其稱を冒りせる者あり

第八

單ニ葉を食ふべき者ハ、漬菜、冬菜を最といひ、漬菜ハ塩ニ漬て、齧といひ、故ニ漬菜と稱するあり、冬菜ハ今單ニ菜と稱す、其他芥菜、茼蒿、菠薐、紫萹、皆純ら葉を食ふ者あり

葉を食ふ者ハ何を最といふ

嫩苗を食ふ菜は何ぞ

第九

根も亦食ふべしといふとも専ら葉莖を食ふべきハ芹三葉芹あり莖根を連ねて食ふべきハ葱野蒜あり嫩苗の食ふべきハ蕨薇獨活筍あり花を食ひ莖葉を食ふハ款冬汁と又他の味を資くべき者ハ山葵薑蔥蘘荷蕃椒等あり

第十

實を食ふ菜ハ瓜茄を最といふ瓜は冬瓜白瓜黃瓜醬瓜あり茄ハ色は紫と青とあり形は圓と長とあり又唐茄と呼ぶ者ハ南瓜の扁と長者として

唐茹て瓜類別類

實を結ぶ桃如何あり種

第十一

瓜の類あり茄類は非らば其他西瓜及甜瓜ハ果は充て食ふ瓜の属あれども菜類は算へ入れば果實の早く實る者ハ桃栗は如りば桃の類多しといふとも花淡紅にして單瓣ある者實を結ぶ事多く重瓣にして花美ある者ハ實を結ぶ事稀あり又光桃あり實に毛ある者あり栗ハ梅雨中は穂を垂れて花を開く菽粟を結ひて中は二三子あり又茅栗あり其實小し

第十二

栗の花は何時開くや

實を結ぶ
梅ハ如何
と称する
梅ぞ

杏ハ何ぞ
似たる樹
ぞ

梅ハ、花の清香を賞し、實の酸味を食用とし、然れども花を賞まざるハ、重瓣にして實少く、實を主にしけるハ、白花單瓣にして野梅といふ者あり、互に得失ある事、猶桃の如し、其種類三百餘種に至る杏ハ、樹葉梅に似て、花淡紅あり、是亦梅の類なり

第十三

實熟して赤きハ、常の李あり、熟まれば白く青きをバ、青李といふ共ニ春小き五瓣の白花攢り開きて、實を結ぶ事諸果より懸く故に其字も木

李の花ハ
何時に
ていふ
る花ぞ



の下に子を書き、其味酸きを以て、酸桃と呼べり

第十四

梨ハ枝を撓めて、架よ作り、花多しれを、之を摘み去り、紙の袋を以て其實を覆ひ、養ひ成す事頗る心を勞ひ、柿ハ枝、置て熟せしむるを木酢といひ、酒氣は薫して、酎とす

橘を如何
して實を
養ふや

橘を何時
船来りて
誰より取
来りしや

を、樽技と呼ぶ。凡て梨柿とも、甘美ありといふ
とも、食り食へハ齒を損す。白標高柿、其處ハ最甚

第十五

橘ハ昔垂仁天皇の朝、田道間守といへる人、初
めて其種を外國より求め得て歸り、これより此
類我國に播れり。蜜柑ハ其味甘く、金柑ハ其形小
し、柚ハ大より酸く、香
橙ハ香しくして甘し、其
他朱欒、枸橼、佛手、柑等次



用材ハ何
を佳しと
るや

茅曰船来して、普く培養
せらるに至れり

第十六

人間の用材とあるべき
木ハ、扁柏、松、杉、尤緊要と
以扁柏ハ古より檜字を
用ゐられり、其類側柏、花
柏等あり、杉ハ材赤きを
赤と稱してこれを重代、其色美あるのこあり
沈文しくして朽ざる、故あり、松ハ其類多し、材



是書ハ 卷三

羅漢松の
形状如何

用ゐるハ常の雄松雌松多れども異品に至り
てハ五葉三葉一葉の者あり又葉色黄あるあり
白きあり皆植ゑて玩弄_レ供_レせしもの又一種朝
鮮松と稱_レる者あり其實食_レふハ對馬陸中北海
道に産_レり

第十七

狗_ノ植_ノ高野植ハ羅漢松金松と稱_レれども松の類
ハ懸_レ異ある物あり狗植ハ花無くして實を
葉間_ニ結_ス其實下大_ニして紅色あり上_ニ緑の
小丸ありて佛像_ニ似_タり高野植ハその實松の

帝_ニ用_ル
了_レハ如何
ある桐_ノ

如く枝_ニ在_リありら上_ニ細葉を生_レ紀伊高野
多_ク故_ニ此名あり又_モ材木と名_レれども扁
柏杉_ニ劣_レれり

第十八

桐_ニ白桐梧桐あり白桐ハ常_ニ器を作_ル良材_ニ
して其花淡紫或ハ白_ク梧桐ハ樹の皮青_ク其花
細_ニして青白あり是亦島桐と稱_レして器_ニ作_ル
其他油桐あり實_{より}油を榨_ス楨_桐あり植_ゑて
花を賞_ム

第十九

堅き材ハ
何々なり

材の堅き者ハ、楮^{カシ}、櫟^{クシ}、榿^{キキ}あり、楮^{カシ}は赤^{アカ}、櫟^{クシ}は白^{シロ}、榿^{キキ}あり、赤
楸^{カシ}ハ、葉粗大にして厚く、鋸齒あり、白楸^{カシ}ハ、葉細く
して、薄く、櫟^{クシ}ハ、葉粟^{アヒ}に似て、材堅く、炭を焼き、薪^{シロ}に
代る者あり、榿^{キキ}、幸落^{コト}樹^キも、亦此類^{カシ}に属^レ、俗^{カシ}に柏^{カシ}楮^{カシ}
の字を通用^{カシ}、以^{カシ}て並^{カシ}に子をとん、栗^{カシ}と稱^{カシ}ふ、小兒^{カシ}これ
を説^{カシ}ふ、其状^{カシ}ハ類^{カシ}せりといふとも、椎^{カシ}楸^{カシ}の食^{カシ}ふべ
き^{カシ}、如^{カシ}くも、比^{カシ}、榿^{キキ}ハ種類^{カシ}多く、真^{カシ}楸^{キキ}、楓^{カシ}、榿^{キキ}等^{カシ}あり
其材^{カシ}堅^{カシ}きを以^{カシ}て、多く殿柱^{カシ}及^{カシ}匣^{カシ}案^{カシ}に作^{カシ}る

第二十

櫻^{カシ}ハ種類^{カシ}多^{カシ}し、且^{カシ}別類^{カシ}ありて名^{カシ}を冒^{カシ}せる者^{カシ}あり、

櫻の名を
冒せる者
ハ何ぞ

くさ^{カシ}櫻^{カシ}、ちんどう^{カシ}櫻^{カシ}ハ榿^{キキ}をいひ、ふさ^{カシ}櫻^{カシ}ハ谷^{カシ}菜^{カシ}を
いふ、又^{カシ}庭^{カシ}櫻^{カシ}あり、郁^{カシ}李^{カシ}の千葉^{カシ}なる者^{カシ}、此^{カシ}名^{カシ}あり、小
米^{カシ}櫻^{カシ}あり、笑^{カシ}靨^{カシ}花^{カシ}の一名^{カシ}あり、上^{カシ}溝^{カシ}櫻^{カシ}ハ、白^{カシ}花^{カシ}細^{カシ}く
穂^{カシ}をち^{カシ}りて開^{カシ}く、扶^{カシ}移^{カシ}ハ、瓣^{カシ}細^{カシ}くして、簇^{カシ}り開^{カシ}く、皆
別^{カシ}種^{カシ}あり、櫻^{カシ}類^{カシ}ハ非^{カシ}に

第二十一

漆^{カシ}ハ、吾^{カシ}國^{カシ}の産^{カシ}、他^{カシ}國^{カシ}に勝^{カシ}れり、樹^{カシ}皮^{カシ}を傷^{カシ}けて流^{カシ}れ
出^{カシ}る脂^{カシ}を採^{カシ}り集^{カシ}めて諸^{カシ}方^{カシ}に輸^{カシ}し、これを製^{カシ}造^{カシ}し
て器^{カシ}物^{カシ}を塗^{カシ}るあり、多^{カシ}く大^{カシ}和^{カシ}、下^{カシ}野^{カシ}、越^{カシ}前^{カシ}、日^{カシ}向^{カシ}、陸^{カシ}羽
等^{カシ}より産^{カシ}れ、せしめ漆^{カシ}花^{カシ}うる、吉^{カシ}野^{カシ}漆^{カシ}等^{カシ}の目^{カシ}あり

漆ハ如何
しく採る

八景集下
卷三

漆の名目
如何

一、種はトの木あり、配りてはせし稱ふ、其葉漆より大なり、實を採りて蠟を造る、

第二十二

来ニ種類あれども、白来、雜来の二種ニ過ぎば、葉の形圓きハ、白来ニ属し、岐あるハ、雜来ニ属し、并ニ葉の厚きあり、薄きありて其形状も、一様ありば、蚕を養ふハ、厚くし



白来雜来
の形状や
何

紙を作る
法如何

て大あるを佳とし、花ハ楮の穂の如く實ハ蕉の如くして長し、

第二十三

楮も亦二種ニ別つ、葉ニ岐あるを構といひ、圓きを楮といふ、并ニ夏ニ至れば、花を開く穂の形粟花の如し、此皮を剥きて細り、碎き黄蜀葵根汁を雜つて紙を抄くあり、故ニ諸國ニ多く裁作る、其他結香蕘花等皆紙を製るへし

第二十四

茶ハ古より我國ニ産せれども、僧榮西、支那の種

茶を傳へ
ハ誰
廣り
誰

を傳へ、僧明恵、これを播き植ゑてより、其製漸く
精しくなれり、今に至りてハ、製せざる地ありと
いへども、鹽江に仍りて、山城宇治の産を最と以、其
花茶サンカウ梅ウメに似て、小く、色白
くして、微し黄を帯ふ、秋
の末に開き、後實を結ぶ
これを採りて、種植け、

第二十五

山茶ハ、茶の類にして、花
を賞むる者あり、秋冬よ



つてきに
何故椿字
を用ひ
ヤ

り花ありと雖、春に至り
て多く開く、故に椿字を
用ゐ来れり、支那の香椿
とハ別あり、其花多種にして、三百品に過ぐ、又茶
梅あり、同類にして、亦多種あり、此花和産を最と
以、故に西洋各國、皆和名を以て通じ、

第二十六

枝細くして下は垂るゝを柳といひ、枝粗くして上
は揚るゝを水揚カキギといふ、柳は官柳オホシタ垂柳コシタの別あり、水
揚は蒲揚エホトシキギ白揚シロギの異あり、蒲揚ハ、葉大にして幹太

揚柳の別
如何

海棠ハ何
の類ぞ

く黒く、白揚ハ葉圓くして未尖れ了者あり、

第二十七

花を賞むる樹木ハ、櫻山茶の類を舍てハ、多く海
棠を稱す。海棠ハ林檎の類にして、二種あり。花の
蒂紫黑色にして長く垂れ、且單瓣重瓣雜ハれた
るを、垂絲海棠といふ。蕾の時紅にして、開けハ紅白
雜ハリ、林檎の如きを、山海棠と稱す。此種ハ山查
子に似し了實を結ぶ、

第二十九

木蘭ハ、葉と共に花を開き、其色紫あり、玉蘭ハ葉

葉より先
花あり
木蘭
亦玉蘭

は先どちて花を開く、其色白く、辛夷も此類
て、花小く紅の暈あり。其他蠟梅、木瓜、百日紅、合歡
棟等、皆木にして花を賞むる者あり、

第三十

花を賞むるハ、以上の数品に過ぎざれども、紅葉
を愛するハ、蝦手を最とし、故に特り紅葉の名を
檀にして、其種類尤夥し、中々霜を被りて、紅に變じ
るを山紅葉と稱す。又一種沙糖を取るべき事、甘
蔗に同じあり。其他春の芽、此色を賞むるあり。
斑葉を愛むるあり、并よりちと稱す。

紅葉を賞
むる何
の木ぞ

木よりて
草に似て
る者何
と名づく
るや

第三十一

木よりて高く聳えたり草に似て其幹冬を經れし
も枯れざる者を灌木といふ牡丹薔薇山吹瑞香
木芙蓉^{多クシ}梔子木槿の類ハ皆花を賞^{タチハナ}以百兩金万兩
藪柑子南天の類ハ皆實を翫^{タチハナ}ふ日用の品は非と
いつとも目を喜を^{タチハナ}めて生を養ふの一端とい
づ

第三十二

竹ハ支那にて芭木と稱^{タチハナ}れ然れども草の硬強よ
して長大ある者あり其花年を經ざれハ開^{タチハナ}り

竹の花の
雄蕊雌蕊
の教如何

三の雄蕊二の雌蕊よりて教の如き實を結ぶ淡
竹^{シクマ}皆竹孟宗竹女竹等の別あり又箬^{ワカ}山白竹根
筴等あり大小の別あれども皆箬と稱^{タチハナ}れ

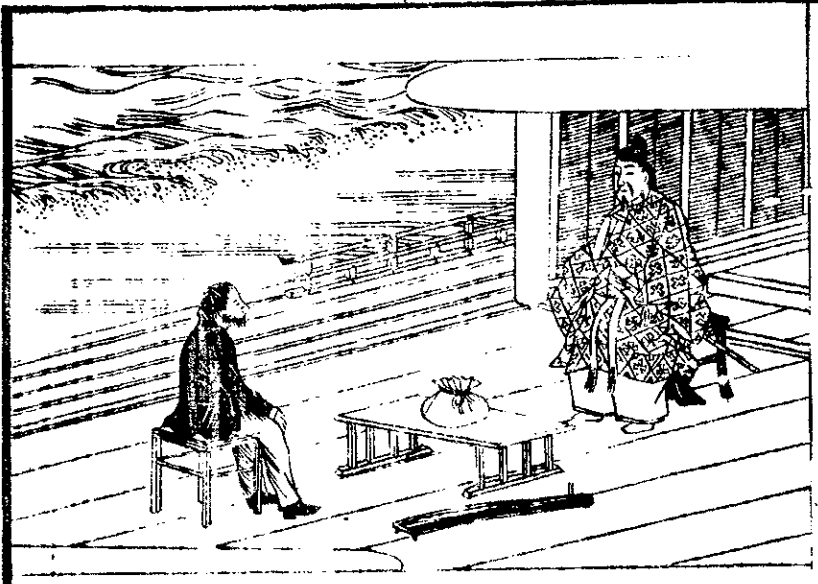
第三十三

草よりて衣とあるべきハ大麻^{アサ}苧麻^{カラ}を最とい大
麻ハ春蒔きて夏これを扱き皮を剥きて水に浸
し細に裂きて線とい苧麻ハ別種よりて宿根よ
り生れ其葉楮に似たり此皮を以て奈良晒越後
縮等の布を織り成^{タチハナ}り

第三十四

衣と為へ
る草如何
ヤ

木綿の何
時渡りし



草綿ハ其始延暦八年、崑崙人三河ニ漂着して其

種を傳ふ翌年紀伊淡路
阿波讚岐伊豫土佐大宰
府ニ種忍一ひ其後中絶
せ一が文禄年中再舶来
して漸これに種ふる事
盛なり花淡黄よりして心
紫多るハ常あり又紅を
帶ふ者あり並ニ春種
名て秋其實を取る

早春の草
花ハ何ぞ

第三十五

寒を犯して先開く草花ハ福壽草雪割草ニ及く
者あり、福壽草ハ黄あるを常とせれども、又紅を
帯ひ、青を帯る者あり、雪割草ハ、紅紫白等の品あ
りて六辨あり

第三十六

春野ニ生トて、花ある者ハ、莖菜蒲公英、紫雲英、櫻
草等あり、其中ニ雜りて、葎土筆の芽を發せあ
るハ其彩色少ありといへども、皆人目を娛むる
ニ足れり、猶秋野七種の草花ニ、地榆、川藍の雜り

春野ニ花
あるハ何
ぞ

て、大に趣を成れが如し

第三十七

三雄蕊よりして、一雌蕊ある、燕子花の類も亦多し
湖蝶花ハ、葉冬枯れざりて春花あり 一ハ馬蘭溪
菘花 菖蒲ハ春新葉を出して、花開くを常とし、此
種ハ、紫花を常とし、白花を異とし、

第三十八

薬用よりしき草花の、美ある者ハ、芍薬、罌粟を最
く以て、薬ハ牡丹より似て草本あり、種類多し、事、牡
丹より重げり、罌粟も花より單瓣、重瓣あり、其小

燕花の類
雄蕊の類
如何

芍薬罌粟
之何時開
くや

て、白毛多きを美人草とりし、并に春末花を開く

第三十九

自生して、花小く淡紅及白きハ瞿麥あり、紅白淡
紅等の花美よりして、莖短きハ、石竹あり、花大より
く、莖高きハ、伊勢撫子といふ、又立田撫子、阿蘭陀
石竹等に至りて、愈其美ある者あり、又剪春羅、雁
雛仙翁花等のり、其花五雌蕊よりして、石竹類の二
雌蕊あるより異あれども、皆十雄蕊よりして、類を同
トくせる者あり

第四十

石竹と剪
春羅の類
と其数如
何

錦葵の花
蜀葵よ
り小あし
り冬葵よ
り小あし
り

瓢箪の瓢
篋も異ち
るハ如何
ちる履ど

葵は類多し蜀葵ハ花美しして大なる是あり花
小く形櫻花の如きハ、錦葵あり、錦葵より更し小
く、花白くして紫紋あるハ、冬葵あり、又加茂山の
葵と、向日葵ハ、別種にして其名を同一くせる者
のこ

第四十一

牽牛花ハ、奇品年毎に出づ、時きて變ぞるが故ち
り、其花朝は開くを以て朝顔と稱ふ鼓子花ハ多
く野生ハ、其花午前十時より開く、皆開花の時を
以て名を異し、然れども、瓢箪ハ其類大し別る

根を食ふ
百合ハ何
と名づく
るや

り、實長きを夕顔といひ、實は約あるを瓢箪とい
ひ、圓なるを瓠といひ、并は其花薄暮は開く、是其
夕顔の名ある所以あり

第四十二

山は自生するを百合と
いふ、花葉共に小くして
其花朱或黄ある者ハ、姫
百合あり、根を菜とし食
ふ者ハ、鬼百合あり、其他
琉球百合、さらさゆて、車



本草綱目

百合、武島百合等の各種あり、近來殊に紅條ベニマシと稱
よる者を貴重に、

第四十三

菊ハ、夏秋冬の別ありといつども、秋末に開く者
を最と以、其種類多くして、數よづらぐは、是また
種で變ぢるゝ因れり、然れども、大抵黄白紫紅の
四種あり、其他貴船菊、蝦夷菊、段菊、濱菊等菊の名
を稱せれども皆其類にあらざり、

第四十四

蘭ハ、原蘭フチハカマ草の名より出て、香ある草の名とあり、

菊の種類
何二因
て殖えし
や

サ網一目
の草く如
何なる草
ぞ

終にサ網一目の草を蘭科と稱するに至れり、其
始に、蘭花より起りて、櫻蘭、葉蘭の如き其類あり
ざる者も、皆稱を冒ふれり、サ網一目とハ雄藥シメの
直に、雌藥メに著ける花をいふ

第四十五

水仙ハ、中古に雪中花と稱せり、花六瓣にして葉
四枚、一科を為して、根は圓き塊あり、重瓣の者を
ハ、玉玲瓏といふ、其早く開く者、安房の海邊より
來り、土地暖まるを以てあり

第四十六

水仙の葉
幾枚一
科を爲し
や

葉を賞する草と何ぞ

葉を賞するを愛する何ぞ

植物の綱目を分るは何國の誰ぞ

凡草類葉の美あるハ、芭蕉、鴈來紅、松葉蘭、葉蘭、葉實共ニ愛をばさハ、萬年青、葉香を賞するハ、石菖蒲、芍薬、芭蕉の類ニ、美人蕉、檀特ありて、花を賞し、鴈來紅の類ニ、錦草、鴈來黄ありて、同く葉を愛し、松葉蘭ハ異葉を重シ、萬年青ハ斑葉を貴ぶ、

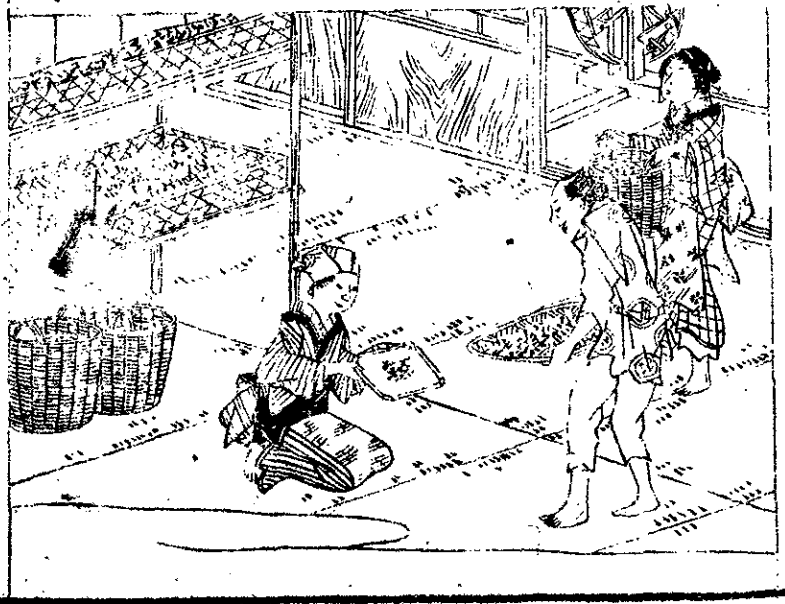
第四十七

凡植物の大綱を二十四ニ別ツハ、瑞典の人、林娜斯の發明より、其一綱毎ニ各數目あり、皆花葉雌雄の數より由りて部類を其綱目極めて精密あり、

れハ幼童粗植物の名と形を知り得く後其學ニ從事すべし

第四十八

蟲類の人用を資くる者、蠶ニ如くハ、一、蚕ハ四眠四起して、皮を蛻以後、簇ニ支りて、繭を作し、繭の中ニ在りて、形を變じて、蛹となり、其形足なくして、兩目あり、復蚕蛾として、



蚕を幾度眠起し、何様の變を了や

あり、繭を破りて出づ、此蚕蛾子を産み着けたる紙を、卵紙タマカミといふ扱めて、来年の種と爲

第四十九

蜂類多しといへども、蜜を釀して、人用は供するハ、蜜蜂あり、其形黄虵メダカに似て、瘡せしう、簇り集り、一團とありて、飛ぶ、其蜜、紀伊の熊野に出る者を最と爲され、次者筑後あり、其他諸國より出ると、蜂の品類多しといへども、皆人を螫るのしにして、用を為さば

第五十

蜂類何所ニ出るを佳品と爲すや

蜻蛉何より變化しや

蜻蛉ハ、其卵を水中に生みて、蟄ヒメとある、其形六足ありて、鋸の如き口あり、夏の初草木より上り、背裂けて復蜻蛉とある、紅黄あるを黄とん不といひ、赤きを赤とん不といふ、翅蝶の如くして色黒きを蝶とん不と稱ふ

第五十一

蝶ハ、諸の毛蟲の化して成れる者あり、毛蟲より蛹とあり、絲を出して樹葉に粘り、後其背裂けて蝶とある、又山椒蟲サカキムシの化して成れるハ、揚羽蝶アサギテフとある、翅は網の紋あり、其小き圓マルあるを、黒蛺蝶ヤマボウシと

蝶何より變化しや

揚羽蝶何より變化しや

いよ

第五十二

蝦蟇山蛤
ハ別ハ同
種

形大にして腹大なるを蟾蜍といひ色黒くして
疾多く臭氣あるを蝦蟆といふ形小にして水中
に棲み聒く鳴く者ハ蛙あり並に其初ハ蝌蚪
て漸々尾を脱し手足を生じ又雨蛤山蛤あり是
其足に珠ありて較種類を別す

第五十三

蝶蟻守宮
石竜子の
別ハ何

古より混れ易くして大に異ある者ハ蝶蟻守宮
トカク
石竜子あり色淡黒く屋の壁間等に居るハ守宮

あり蛇に似たる鱗ありて褐色或ハ緑色なるハ
石竜子あり水に棲みて色黒く腹赤きハ蝶蟻守
宮

第五十四

蟻ハ春暖の時より土上に出て秋末食を貯へて
土中に蟄伏赤蟻黒蟻等種類多し白蟻ハ朽木の
中より生じ蟻に似て色白く後四羽を生じて飛
ぶ然れども再羽を脱して地上を行く

第五十五

蟲類多しといへども藥材に用ゐる外ハ大抵人

白蟻
ハ別ハ何
種

聲を愛け
了虫ハ何
ぞ

は害あらざれば、或其形悪むべく、或其真厭ふべし。蜘蛛、蜈蚣、蛇、蚰蜒、馬陸の類是をり、蚊、蚊、蠅等に至りてハ、人の最憎む所なり。但其愛むべきハ、草雲雀又螢、松虫、鈴虫、蟋蟀、蟬等の類のこゝ

第五十六

我國ハ、四方ハ海の環れこゝに因りて、河海の産物



淡水鹹水
ハ何ぞ
や

殊に多し、故に人の食多く、これに資し、其品類記より、違ありて、然れども、淡水の産、鹹水の産、日常食ふ所此者ハ、粗識るん事を要し、其詳あるハ、動物學に從事して、晰らむべし。

第五十七

鯉ハ、淡水に産まりて、大なるハ五六尺に至る者あり、武蔵利根川、山城淀川の者、其名高し、猶近江湖中の鮒を賞むるが如し、又東京淺草川の産、鯉古來世に名あり、一種白魚あり、岐骨多くて、食ふに堪へず、又緋鯉あり、金魚に類し、て、畜ひ

鯉鮒ハ何
處に生を
とけし

説ふ者あり其類白きあり斑ありあり

第五十八

鰻鱺ハ何所の産を佳とけり

鯉より亞く者ハ鰻鱺、鮒とい、鰻鱺も鯉と同トく湖海池沼より生ぜど雖も長流の河水に在る者を最とけ因て東京淺草川の者を江戸前と稱しこれを貴重に又赤鰻、筋鰻と稱するものあり又八つ目鰻と稱するもの有り多く二羽越後及ひ信濃諏訪の湖に産び白点八つあるを以て名づく

第五十九

鮒の種類如何

鮒ハ近江湖中此者を最とい其瀬五郎鮒と稱す

鱒鮒何處に産まじや

了ハ長さ一尺二三寸に至り其他紅鱒、白鱒あり、鮒鮒と稱するあり並に其名諸州に著し

第六十

鱒ハ多く東北國に産ま形鮒より以て鱒細く赤條ありて其眼中を貫ぬけり鮒も淡水の産より是亦東北國に多く醃より鮒を塩引と稱し北海道及越後多くこれを出す

第六十一

玉島川の年魚何故名高きや

鮒ハ諸國に多し然れども肥前玉島川の産其名あり是神功皇后此魚を釣りて軍の成敗を占ひ

給ひしに因れり且點字の作れし所以あり此魚河水に生じて下り秋の末河に游り子を草石の間で産じ再び下りて死すは二年魚といふ

第六十二

鯿ハ、早春より水田小溝中へ生育れ、それより河水に又出づ、二寸許をを、おぼこと稱は洲走りといふ



洲走り

鯿の大小其名を何

鯛の類幾種あり

稱へ鯿魚と稱ふる皆成長より由て、名を異なせりあり、其至て大なるを、鯿といふ、河海に在りて、年を経る者あり一種赤目烏と稱せりあり形相似て其目赤し鯛を取りて鯛を作る者是あり

第六十三

海産の魚ハ、鯛を最とし、故に我國にてハ、慶賀盛饗必とれを須つ、此故に鯛の名を冒し魚八十餘種に至る、然れども皆別類として形味共々大異あり、只仕鯛、絲より鯛、及黒鯛、紫鯛類として、味も亦とれより重く者あり、

鯨ひめ
の別如何

第六十四
鯨、平目ハ、其ノ半片白ク、半片黒クして、黒キ方ニ
目あり、其形ハ似たりといふども、大ニ異ある所
あり、右黒くして左白きハ、鯨あり、左黒くして右
白きハ、平目あり、鯨ハ其類多シ、星鯨、石鯨、めいと
まくと等ノ目あり

第六十五

古ハ堅魚を鮮ニて食ふ者少シ、皆腊ニ作れり今
ノ堅魚節是あり、然れども、後世其鮮を賞むる事
他魚ニ踰えり、鮮あるハ、相摸ノ鱧倉を名産ト

堅魚は何
處の産を
佳し、或
ヤ

魚類の假
字、俗字
の別如何

一、腊ハ土佐の清水を最とし、

第六十六

尋常食ニ供せべき海産の魚多シ、故ニ新ニ字を
制して、通用せざる者あり、是皆簡便を主として、其
審あるを得ざるニ出づ、鱒魚を鱒ニ作り、牛尾魚
を鯛ニ作り、梭魚を鯉ニ作り、竹麦魚を魴鯉とし、
火魚を金頭とし、琵琶魚を鯉とし、如きは是
あり、鯛を鯛、青花魚を鯖、魴魚を鯉、石首魚を鯉と
するが如きは古字或ハ假借ニして俗字ニ非ズ
混むべからず

八、魚類

五

章魚の大
方ハ何
國の産

第六十七

章魚、飯蛸、手長蛸、蜘蛛蛸等の品類あり、並に皆八足よりして、尻^{イホ}あり、越中滑川、羽前庄内の者ハ足の長一丈二餘る者あり、烏賊、障泥^{シロ}い、尺八い、あり、鰯^{イサ}い、ハ乾して鰯^{イサ}と作る、又ひい、と稱ふるものあり、其形至て小、飯蛸の章魚、於る、如し

第六十八

蟹ハ、蝦、類を同ト、て、異なる者あり、鹹水



食用の蟹
ハ何し称
はるや

産するハ、蜘蛛^{クモ}あり、又海蟹と稱ふ、其甲横は潤し、左右は各一刺あり、食用とける者是あり、其他蟻^{アリ}てんがら、甲蟹等、其類夥し、螃蟹^{エビ}等の淡水は産するハ、毒あり、食ふべからず

第六十九

介類、貝類^{ガイ}あり、蚌類^{カラスミ}あり、蛤類^{カク}、螺類、蝸類あり、又大に異なるハ、石決明^{イハバ}の類あり、介を翫^カよ者、皆其



介類の大
體幾種

名を美として、諸州より採り集む、故に其名一物
として、數名に及び記せしむるに違あり

第七十

貝ハ、又、こやまがひとつひ、左右に齒あるを以て、
又齒がひとつひ、支那の古に、貨に用ゐるとも介あり、
并ハ又溝がひといふ、形圓く長くして、其殼薄く、
外黒くして、内青く光りあり、蛤ハ其文一あり、
以、或ハ全く黒きあり、烏がひと呼ぶ、全く白きあり、
耳白と稱ふ蛤、赤貝、蚌、殼堅くして、両片合
つる者皆此類とい

蚌蛤の別
如何

第七十一

螺類ハ、其殼左に旋りて、中に肉ある介の、總名を
り、榮螺、辛螺より、田螺に至るまで、皆是あり、其口
を蓋ふ物を、唇といふ、蠣ハ、蠣、磯がきの品あり、
殼を灰として、石灰に代へ、又薬用として、肉を食用
として、石決明ハ海中の石に貼く肉青きを雌と云
ひ、褐色を雌といふ、其一種至て小きを、鰓と稱ふ

第七十二

鶴は種類多し、白くして頂赤きを丹頂と稱ふ、又
白鶴、陽鳥あり、鶴、雛ハ白鶴より小くして、頸肩白

石決明の
雌雄如何

丹頂の鶴
如何

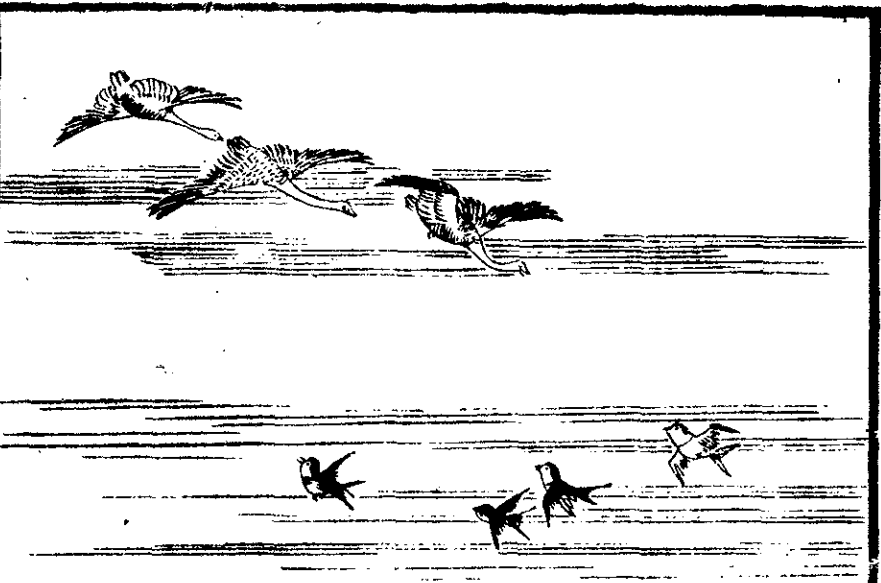
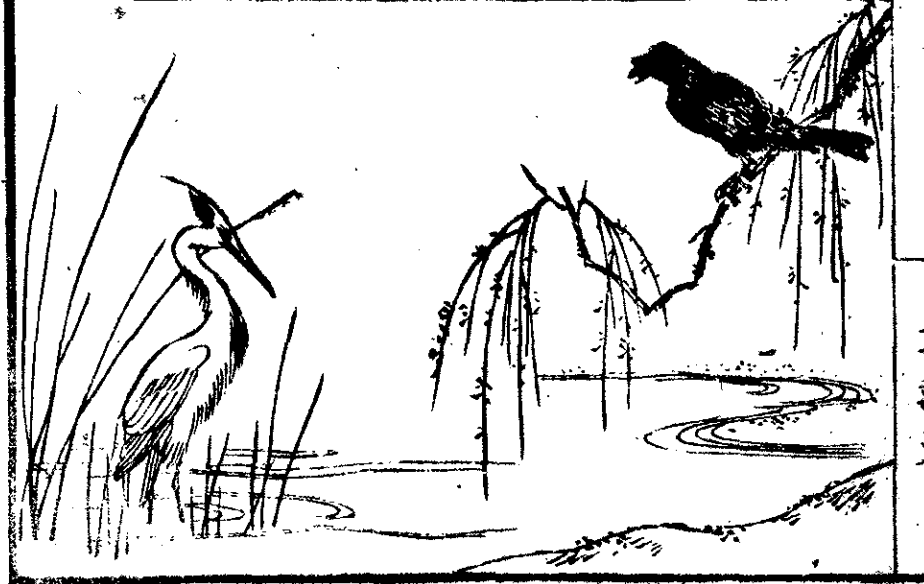
本草綱目 卷之三 鳥部 鶴

頂毛は
き驚何
と名つ
了
嘴扁ま
何し名
くすや

く、額頰赤し又、額もこふ
づると稱ふ、大さ丹頂の
如くして全身白く、其聲
物を敲くに似たり

第七十三

全身潔白にして、長毛敷
莖頂上は在るハ、尋常の
鷺あり、一種頂上は毛を
きを、だいさぎと稱へ、形
小きを一盃さぎと稱ふ



鷺に似て嘴扁く、鏡の如
きを鏡鷺といふ、鷺より
大にして、背淡青きを青
鷺といふ、又其翅の裏淡
紅あるハ、朱鷺ありさぎ
と稱へ、俗に鷺といふも是
亦一類あり、俗に鷺色と
いふハ、此色より起れる
あり

第七十四

鳥鴉の別
如何

鳥ハ村里市中又多シ、故ニ里鳥ト稱ム、及哺の孝ありと、いひ傳ふる鳥是あり、鴉ハ嘴肥大ニシテ食を貪る事、里鳥より甚シ、又深山ガらバあり、或ハだけガらバト稱ム、大ニ鴉ノ如クニシテ翼青ク、翅黒ク、背赤シ、又鶻あり、東國ニ来ラバ、九州ニ多シ

第七十五

燕鴉ハ何
時来リ何
時去リ

燕ハ春分此地ニ来リ、人家ニ入りテ巢を結ヒ、子を育シ、秋ニ至リテ暖地ニ歸リ、又大ツぞめあり、其胸常の燕ノ如ク紫色ニシテ斑文あり、鴉

鴉鴉の別
如何

ハ春分此地ニ歸リ、秋ニ至リテ此地ニ来リ、種類多シ、真鴉ハ鴉ニ似テ小シ、白鴉ハ全體白クシテ背脚淡紅あり、かりが子ト稱ム、ハ、鴉より小シ、全體蒼黒ク、額白シ、鴉ハ雁より大ニシテ、背頸淺黒褐色ニシテ、羽ノ邊毎ニ白シ

第七十六

鴉ハ俗ニ土鴉トイフ、今多ク家ニ養ム者是あり、珠數掛鴉ハ、羽色數品あれども、皆頸項ニ白斑あり、青鴉ハ鴉より大ニシテ、全身黒緑、常ニ山中ニ棲メリ、其他雉鴉、孔雀鴉、金鴉、長生鴉等ノ類、皆形

状羽色に因て、其名を異にせりあり

第七十七

我國鷹を放つハ何時より始す

鷹の類を俗に四十八鷹と稱ふるハ其多類をいへりあり、其至大あるハ鷲あり、其力狐兔を攫え、嬰兒を捕去るに至る、小なるハ鵂の類あり、形小なりといへども、猶能小鳥を捕つ、鷹を養ひて、諸



鷹の字如何

鳥を捕らむる事仁徳天皇四十三年、百濟酒君始て馴し得て、天皇に獻了、これを百舌野に放ちて、雉を捕らむるを、れり、又鷓鴣をいふ、其雄を鷓鴣と稱ふ、雀鷓鴣、雌の名あり、雄を雀鷓鴣といふ、其他雉、一ハ等種類殊に多し、

第七十八

聲を賞して古より吟詠をる鳥多し、うぐいすハ古に春鳥の字を用ひ、又鷺字を假借也、我邦一種好音の鳥にして、別其字あり、告天子ハ春蘭け

扶鷄の類
如何

てより雲端より上りて鳴く故に雲雀の名あり其類多し此二鳥野外の者も佳といへども人家に養ふ者ハ殊に上等にして人々これを貴重し

第七十九

人の吟味も鳥夏ハ時鳥水雞を稱し時鳥ハ其聲の稀なるを愛し水雞ハ其閑寂を詠し然れども時鳥ハ地より由て其鳴く事の多く暗き處あり水雞ハ夏の初に鳴く其聲物を敲く如し其類赤水雞鼠水雞大水雞等の稱有りて形状一ならず

千鳥の類
如何

第八十

秋ハ初雁鷄を詠し冬ハ千鳥鳧鴛鴦を賞む或ハ其聲其形の美を愛し或ハ其趣あるを詠み鷄はふあり鷄有り其身に斑文あり千鳥は澳千鳥岩千鳥川千鳥の類あり鳧鴛鴦ハ并に冬来りて夏歸る事雁と同じ鳧は秋沙味鳧輕鳧等其類舉ぐるに違あり

第八十一

人の愛詠も鳥此國に産せざる者多し孔雀鸚鵡インコ鸚哥九官等最も貴し所あり小鳥は金絲雀カナリヤ

愛玩せし
小鳥の目
如何

十姉妹、文鳥等、異禽甚多し、又雀、鶉、鶉、鶉、鶉等の野
禽に至りても、其毛羽の奇なる者ハ、貴重なる事
舶来に埒し

第八十二

熊胆何
處の産を
上とする

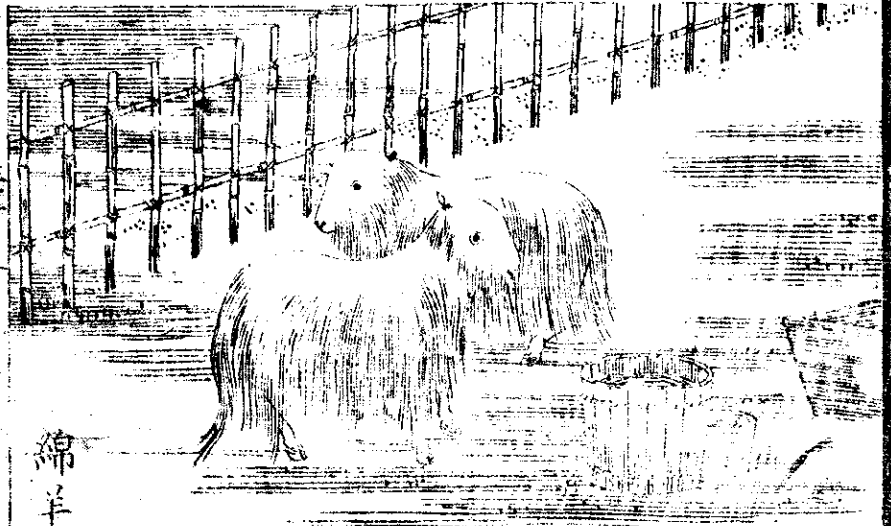
熊ハ全身黒色にして、喉の下は白紋あり、新月の
如し、これを月の輪と云ふ、熊ハ熊より大にして、
黄色を帯ふ、喉は月の輪あり、多く北海道は産以
其力熊より強くして、往々人を害む、大凡熊膽
を藥に用ゐ、其皮を坐褥とせれども、並に山谷の
者を佳し、以海邊の者ハ、其膽肥く、皮毛純黒あら

六畜何
を云

也

第八十三

支那にて牛、馬、鶏、犬、羊、豕、
を六畜と稱し、家畜を
者なきバあり、牛、馬ハ重
を負ひ、遠く渉る、人間欠
くところからざる獸あり、犬
ハ我國に種類少し、オオカミ 兎、ウサギ 狢、イノシシ 狢
の類に過ぎざり、近來舶載
して、其種漸く播れり、羊



綿羊

綿羊の毛
を何に用
ゐる

も舶来あれども未多からば、尺綿羊ハ頗る多く、
毛織に用ゐるを以てあり、亦も舶来の種ありて、
其類差多し、尺野猪のこハ、山野に多くして、田稼
を損ト人の害をなん

第八十四

豺狼の別
如何

豺ハ山中に棲む、狗に似て瘦し、其爪麻骨の如
く窪あり、狼ハ喙長く、口大にして耳小く、脚は蹠
あり、毛色多くハ淡き赤褐色あり、并に他獸を食
ひ、人を害し、但狼肉ハ食ふべくして、豺肉ハ食ふ
べからず

第八十五

虎狸猫狸
の形状如
何

狐ハ毛色黄赤色を常とられども、又白黒等の異
あり、尾拵きつ子と稱するハ其大さ鼬の如く、
して蹠あり、狸も亦類多し、頭瘦せて狐の如きを
虎狸といひ、頭圓く猫に似たるを猫狸といふ、又
貉も同類多し、狸に似て頭尖り、鼻出て目青し、猫
も亦此類多し、狸より肥て淡黒く脊は黒條あり

第八十六

黒色にして形小く、尾を銜て多く連行するを
鼬鼯といひ、形小く手長くして、上中に棲むを鼯

鼯鼠の形
状如何

鼯鼠といふ、其他廿日鼠あり其形小く川鼠あり、河
邊に棲む、并に皆鼠類にして、少く異あり者ち
り、只其殊に異ありハ、鼯鼠あり、形鼠より肥えて
足短く、上啄尖りて前より出づ、常に土中に棲む、偶
日を見れば動く事能はば、

第八十七

貂ハ何國
に産せり

貂ハ尋常人家に棲む者あり、黄貂ハ此物の年経
たり、非に自ら一種あり、其毛長く黄よりて光
あり、貂ハ此國に産せり、朝鮮に多し、白色又黒き
者あり、又栗鼠も此類にして、山樹に棲み果實を

鯨江豚
魚の獸



食ふ、又木を食ふといふ稱ふ、

第八十八

海獸ハ、魚の如くして、獸
毛あり者あり、東北海に殊
に多し、海鹿、海豹、海驢、
虎、熊、鹿等、各形ハ異な
れども、皆同類にして、別
種なき者あり、又鯨江豚
も、古来魚類に属せれど
も、其實ハ亦一種の海獸

こゝて、魚類は非人

第八十九

猴ハ山中多シ、人家ニ畜ヒテ、馴レハ、ハカス時ニ
能ク人語を解シテ、種々の技藝を有シ、是他あり
凡動物ハ、皆身中ニ血ありテ、肺を以テ呼吸シ、其
中第一等を二掌類トシ、第二等を四掌類トシ、第
三等を四足類トシ、ササキ猴ササキ類々ササキ佛ササキ々の類ハ、即四掌
類トシテ、大ニ人ニ近シ、故ニ其性の靈なるも、亦
人ニ近きあり

第九十

猴ハ何類
と稱ス
ヤ

人種ハ幾
ト云フヤ

人ハ、動物中の第一等トシテ、即ニ掌類あり、其性
大ニ他ニ異レリ、故ニ古ヨリ萬物の靈ト稱シ、黃
人白人赤人黑人棕色人の五種ニ部分セレトモ
も、トヨリ四掌四足の類ト復リ、同トクニ、故
ニ猴ニ似テ、猴智慧ト嘲リ、獸ニ似トス、禽獸
行ト罵リ、若其智猴の如ク、其行獸の如クハ、これ
を第一等トイフべし

北爪有卿 画

讀本卷第三終